

島津氏の縁組

—重豪・斉宣・斉興を中心に—

林 匡

はじめに

筆者は、平成二五年度黎明館企画特別展「島津重豪」に関して、八代藩主島津重豪（久方・忠洪）以前の近世島津氏本宗家の縁組（婚姻・養子成）について検討を加える機会を得た。以下その要点を挙げる。¹⁾

（一）島津氏歴代藩主・家督の正室と側室

初代藩主島津家久（忠恒）の代には、家久の置かれた島津家内の位置や政治状況が色濃く反映された婚姻がなされた。家久自身は豊臣政権や徳川幕府から島津氏本宗家の家督継承者として承認されながら、一方でその前提として求められた舅義久の血統継承のため、義久三女亀寿（持明院）を正室に迎える以外に選択肢はありえず、いやむしろ亀寿あつてこそその相続とみなされた。この義久血統重視の意識は、義久その人の死後においても、慶安夫人（島津忠清娘。祖母も義久長女御平）が生んだ嫡子光久（忠元）を亀寿の子としたことに表れている（光久は亀寿の直子同前とされる一方、後には慶安夫人も正統の夫人（正室）に位置づけられていく）。また光久の正室には、家久が領国経営に危機感をもって臨み、家臣団統制に苦慮していた寛永期の状況下で、最も信頼しうる家老伊勢貞昌の孫娘（曹源院）が選ばれており、家久代の縁組には当時の政治状況が強く表れている。

これに対して、二代藩主光久の継室として寛文二年（一六六二）に公家の平松時庸養女（陽和院。実父は交野時貞）が迎えられるが、これが何

らかの藩内の政治状況に直接左右されたものとは捉え難い。但しこの縁組は、始祖忠久以来の近衛家との関係を意識したであろう島津家にとり、平松家や交野家という近衛家家礼との関わりを深める契機となったであろう。

光久嫡子綱久（久平。襲封以前死去）の正室は、松平（久松）家から迎えられる（真修院）。この縁組は、自分の姉妹（御屋地と御下）所生の娘を続けて松平定行に嫁がせた、家久の対徳川家接近策の縁によるものであり、以後も久松松平家は島津家にとり重要な姻戚となる。島津家以外から正室に迎えられた陽和院や真修院は、江戸藩邸奥向きにおいて、子女養育その他一定の役割や活動が確認できる。²⁾

三代藩主綱貴（延久）の正室には旗本松平（鷹司）氏（米姫・常照院。実母は紀伊徳川家頼宣娘松姫。姪祿為姫は上杉綱憲室）が迎えられたが、米姫は早く亡くなり、継室の上杉氏（鶴子・於七。上杉綱憲養女。実は吉良義央娘で綱憲の姉）とは離別するに至る。一方で綱貴は、はじめ側室二階堂氏（於重・蘭室院）との間に嫡子吉貴（忠竹）をもうけて彼女を国夫人としている。於重の死去後、綱貴は二男久儔（忠英）や亀姫（後に近衛家久簾中）を生んだ江田氏（於登代・信證院）を重んじ正式に継室に立てている。

四代藩主吉貴の正室松平氏（福姫・靈龍院）には実子が生れなかったが、一方で福姫は、六代將軍徳川家宣・御台所熙子（近衛基熙娘・天英

院) 夫妻に対する献上物について女使を認められており、ごく限られた大名家に認められた幕府奥向きとのルートを鳥津家も確保する。五代藩主継豊(忠休)は、將軍家養女の竹姫との婚姻を内々に打診してきた親子の要望もあり、正室に毛利氏(皆姫・瑞仙院)を迎える。この皆姫も、福姫同様に將軍家との諸儀礼において正室としての役割を果たした。

家久から継豊の代では、家久以来の松平(久松)家及び支藩佐土原鳥津家を中心に親族が形成され【系図】、綱貴や重年の死去と吉貴や重豪の襲封、その他藩主不在時や病気の際の江戸城登城や諸儀礼の代理にこれら親族大名・旗本が依頼された。また天英院(熙子)の積極的関与による、享保一四年(一七二九)一二月の継豊継室としての竹姫入興の実現は、徳川家と鳥津家との関係をより緊密なものにする。かつて天英院との間に成立した奥向きルートは、寛保元年(一七四一)の天英院死去後は竹姫(浄岸院)により維持強化された。

六代藩主宗信(忠顕)は、元文五年(一七四〇)に尾張徳川宗勝娘(房姫)と婚約するものの、寛延元年(一七四八)房姫が早世、翌年その妹との縁組が図られたが、同年七月宗信の早世でこれも実現しなかった。³兄を継ぎ加治木鳥津家当主から七代藩主となった重年(久門)の正室(継室。初室於富〔登美〕は延享二年(一七四五)重豪を出産直後死去。正覚院)は、竹姫の強い意向もあり、花岡鳥津家から迎えられる(於村・智光院)。

側室であれ、藩主嫡子の生母が重んぜられること自体は鳥津家も他家と同様であり、前述したように内々には国夫人や本妻(正室)同前とされ、知行所持の事例も確認できる。吉貴生母の二階堂氏(於重・蘭室院)、継豊生母の名越氏(於須磨・月桂院)、宗信生母の渋谷氏(於嘉久・

妙心院)はその事例であり、それぞれの実家、二階堂氏・名越氏・渋谷氏の者も恩恵に浴す。この点では綱貴から本妻の扱いを内外共に示された江田氏(於登代・信證院)の存在は、嫡子生母でないだけに特異である。綱貴二男として守護代とも目された久備(忠英)の存在との関わりが推察される。

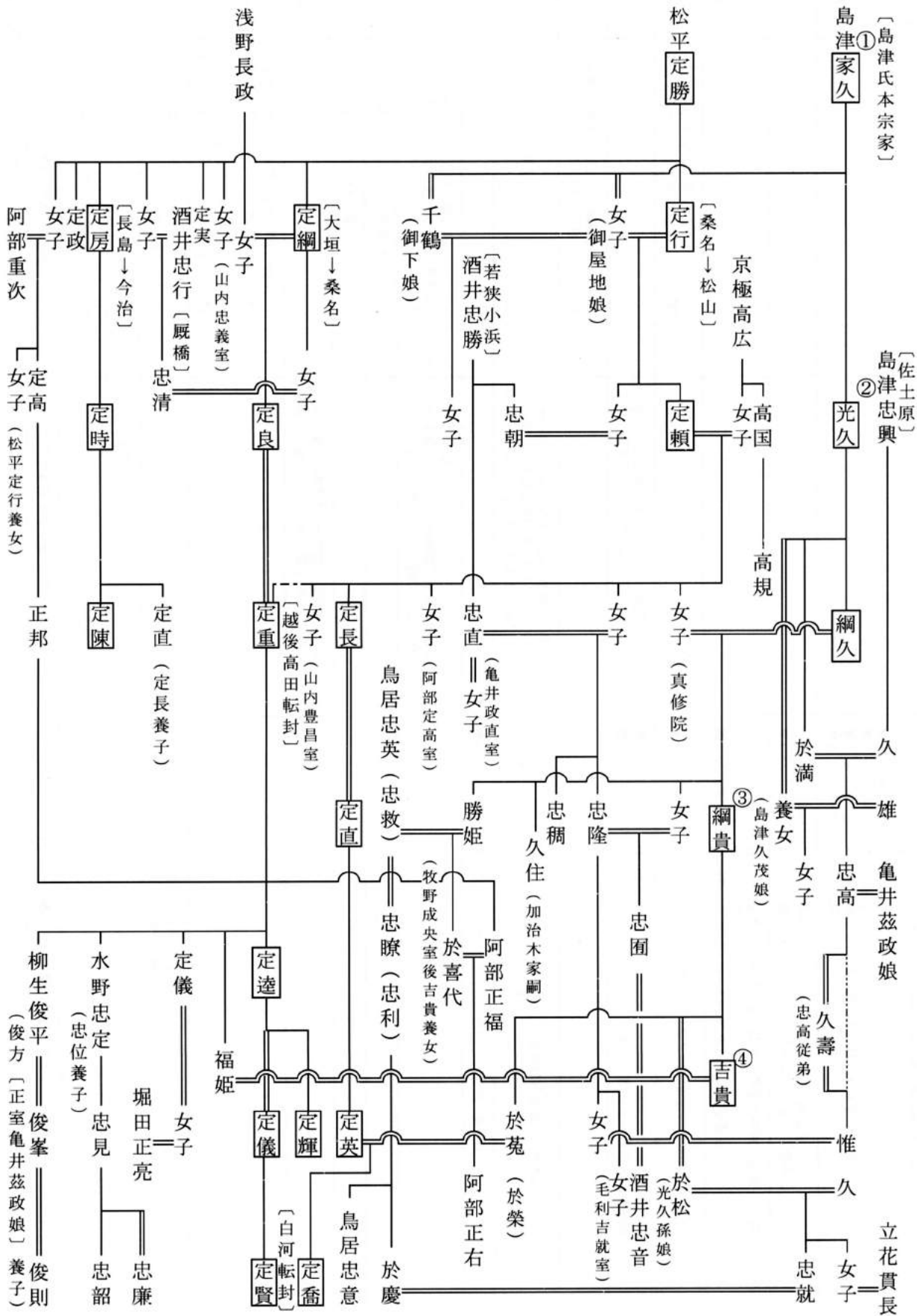
なお系図上、子女を生んだ女性について、光久の側室に見られる「家ノ女房」「某氏」といったような出自不明の記載は、他の家督の側室には見られない(但し光久の子女の扱いに大きな差異は認め難い)。むしろ重豪以降の側室には、その出自など詳細な調査が記録所職員によりなされている。

(二) 子女の縁組

家久から継豊代までの藩主子女の婚姻をまとめておく【表1-5】(光久嫡子・綱貴父の綱久子女については【系図】参照)。ここからは、①大名家との縁組は少なく、家久は養女2人、光久は養女を含め3人、綱久2人、綱貴は養女を含め2人、吉貴は養女1人、継豊は1人。旗本では、2代光久庶子久達は一時伊勢貞衡養子となるが後に辞している。②男子の他家相続は見られない。③公家との縁組は、吉貴の代に近衛家久との二度の縁組(吉貴の妹亀姫と娘の満姫)が成立したことが確認できる。満姫は近衛家養女となるが、これは17世紀後期から18世紀前期の綱貴・吉貴の代ですすめられた鳥津家の歴史認識・由緒の強調を背景としながら関係強化が図られた結果といえる。⁶なお補足すれば、光久庶子の桂久祐二男(勝之)は、陽和院との関係で平松時方娘を養女とした旗本三枝守英の賀養子となる(守尹)。

鳥津氏本宗家の多くの子女は、18世紀中期までに固定される一門家以

【系図】島津家（本宗家・佐土原家）と久松松平家・酒井家・鳥居家・阿部家等との関係



①④は薩摩藩主代敷

表1 家久子女一覧〔養子・婚姻年月日〕*1

生年/室	鎌田播磨守政重娘	島津備前守忠清娘(後夫人*2)	○相良氏娘・◆宮原氏・■牧原氏・★家村氏・▲崎山氏・□川村氏娘
慶長17 (1612)	兵庫頭(慶長17、12、9～慶長19、1、28)		
慶長18		女子(慶長18～元和元、3.15)	
慶長19 (1614)	女子(慶長19、2、3～寛永9、3、5) 北郷山城守翁久室〔寛永4〕		○女子(慶長19、8、5～慶安元、閏1、9) (日置)島津彌正久慶室〔寛永5〕菊寿
元和元 (1615)	女子(元和1年4、20～寛永20、4、13) 種子島左近大夫忠時室〔寛永8〕		
元和2	忠朗(元和2、11、7～延宝4、2、16) 加治木島津家創設〔寛永8知行→同13〕	光久(元和2、6、2～元禄7、11、29)	
元和3		忠直(元和3、11、26～寛永18、11、6) 久敏養子〔寛永1〕→北郷忠亮後嗣〔寛永11〕	
元和4	女子(元和4、9、13～寛永14、3、24)		
元和5	女子(元和5、10、20～寛永11、8、18)		
元和6	忠広(元和6、12、18～元禄16、8、3) 御屋地養子(豊州家二男家)〔寛永13?、同16還俗〕→加治木二男家〔延宝5〕	女子(元和6、6、18～正保2、5、10) 新城養女〔寛永1〕→婚姻、島津大和久草室〔寛永13〕千亀	◆忠高(元和7、2、2～延宝4、9、3)町田久幸後嗣〔寛永元〕
元和7			
元和8 (1622)	重永(元和8、7、20～貞享5、8、23) 林綾七郎重政養子〔寛永11〕	忠紀(元和8、2、19～正保4、8、22) (垂水)島津久敏後嗣〔寛永11〕 →信久(忠仍)死去・垂水家相続〔寛永14〕	○久雄(元和8、8、11～寛文7、7、12) 林綾重娘(重政早死)養子〔寛永4〕→(永吉)島津中務忠榮養子〔寛永11〕
寛永元 (1624)	女子(寛永1、9、14～正保1、7、19) 敷根(寛永20島津姓)筑前久頼室〔寛永16〕		
寛永2		女子(寛永2、7、3～寛文11、6、3) 肝付伴兵衛兼屋室〔寛永16〕滿鶴	■正勝(寛永2、6、13～寛文6、6、4)伊集院久族養子→鎌田治部政統養子 ▲女子(寛永2、11、16夭折)
寛永3	久国(寛永3、11、26～寛文1、6、25) 伊集院石馬助忠広養子		★女子(寛永3、7、15～承応2、12、1)(宮之城二男家)島津中務久茂室
寛永4			■久朝(寛永4、12、18～元禄17、2、15)伊集院遠江久族養子 □忠心(寛永4、5、25～延宝3、8、11) 桂忠能養子〔寛永11-慶安2〕→(日置)島津下総常久後嗣(久慶・久豫系因削除)
寛永6			▲貞昭(寛永6、5、14～寛文3、8、4)伊勢兵部貞昌養子〔寛永7〕 □久高(寛永6、7、4～正保3、1、9)榊山助七郎久辰養子
寛永8			▲女子(寛永8、正、6、夭折) ★女子(寛永9、5、13～承応2、11、20)入来院石見重頼室〔慶安3〕 ▲女子(寛永10、3、12夭折) ▲女子(寛永11、2、24夭折) ▲男子(寛永12、9夭折) ▲女子(寛永13、10、18～宝永5、10、27)(宮之城)島津図書久竹室
寛永13			

*1 この他、家久姉御屋地娘・妹御下娘(千鶴)を養女として、久松松平家の定行正室とする。

*2 「御祭祀提要」では亀寿を「御夫人」と表記する。

表2 光久子女一覧(1)

婚家・養家(男■女▲)分類

生年/母	正室 曹源院 ●継室 陽和院	○【島津氏正統系図】父兄姓名記載欄室	【家/女房】	大名	旗本	島津	異姓
1 寛永9 (1632)	綱久(久平。寛永9、4、1~寛文13、2、19)			世嗣			
2 寛永11	於滿(寛永11、6、11~慶安5、1、11) 島津右馬頭久雄夫人・忠高実母 *1			▲佐土原			
3 寛永17						▲日置	
4 寛永19 (1642)		於辰(寛永17、6、23~元禄3、9、23) ○松沢八右衛門娘 島津久慈(久豫)室 於西(寛永19、3、25~元禄6、11、1) ○黒田頼清娘 島津又八郎久薫室				▲加治木 ■北郷	
5 正保元 (1644)		久定(久統。正保1、12、23~寛文2、7、5) ○松沢八右衛門娘 北郷久直後嗣				■喜入 →北郷	
6 正保2 (1645)			忠長(正保2、6、3~寛文10、11、12) 喜入家→兄(北郷)久定嗣				
7 慶安3 (1650)		久孝(慶安3、8、9~寛文8、12、12) ○救仁郷頼重娘 島津久近後嗣				■佐志	
8 慶安4 (1651)			久達(貞朝。慶安4、10、15~享保4、8、20) 伊勢貞衛養子→佐多久利後嗣		■伊勢	→佐多	
9 明暦1 (1655)		久侶(久雄。明暦1、6、23~元禄10、9、28) ○津留正持娘 島津忠清後嗣				■新城	
10		於虎(明暦1、8、9~天和2、12、18) ○新納忠頼娘 島津忠興(久竹)室 *2				▲日置	
11 明暦2			正長(明暦2、4、19~天和3、4、16) 鎌田正勝養子				■鎌田 ▲入来院
12 明暦3 (1657)		於龜(明暦3、4、19~享保16、9、23) ○新納忠頼娘 ○新納忠頼娘 入来院重治室					
13		忠智(忠頼。明暦3、6、5~享保12、閏1、28) ○玉利重親娘 島津忠清→兄忠長後嗣				■新城 →北郷	
14 万治1 (1658)			久亮(忠辰。万治1、10、14~享保7、11、15) □(中井氏) 兄喜入忠長後嗣			■喜入	
15 万治2 (1659)			久明(久治。万治2、6、5~享保2、4、5) 元禄14年準二男家			別立	
16 寛文1 (1661)			萬鶴(寛文1、3、9~享保19、7、22) 北郷忠昭室			▲平佐北郷	
17			千亀(寛文1、7、8~享保7、6、8) 伊勢貞頼室				▲伊勢
18		於長(寛文1、8、27~元文4、9、29) ○有馬新左衛門純実娘 島津久洪室 *3				▲宮之城	
19			久當(久寛。寛文1、10、20~享保14、8、17) 兄島津久岑後嗣			■佐志	

*1 島津久雄室には光久養女(島津中務久茂娘)が続けて入る(【島津氏正統系図】には記載なし)。

*2 娘は光久養女として桂忠親(忠厚)後室。

*3 久洪娘於松は綱貫養女として島津惟久継室。

参考:【島津氏正統系図】(島津家資料刊行会)、「祠堂要覧」、「御家譜」、「御祭祀提要」、「支流系図」、「諸家系図」 以下同

表2 光久子女一覧(2)

婚家・養家(男■女▲)分類

生年/室	正室 曹源院 ●継室 陽和院	○「島津氏正統系図」父兄姓名記載御室	「家」女房]	大名	旗本	高津	異姓
20 寛文3 (1663)		虎鶴(寛文3、12、3~天和2、8、22) ○新納忠頼娘 島津内記久文室				▲宮之城 二男	
21 寛文4	●菊千代(寛文4、3~6)						
22 寛文5							
23						別立	
24		久祐(寛文5、11、8~宝永8、6、27) *1 ○鹽田国美娘 桂久帯(久澄)養子	久記(寛文5、11、3~享保18、4、7) □(濱田氏) 元禄14年11月14日準四男家			■桂	
25 寛文6	●陽和院兼養女 織田信盛夫人(智性院)	於鶴(寛文6、8、8~正徳1、7、20) ○実母は岩山直朝妹		▲織田			
26			千代鶴(寛文6、8、22~貞享元、9、1) 桂忠頼(忠厚)室 *2			▲桂	
27		基明(義扶。寛文6、12、8~延享3、9、12) ○味方正信娘 *3 阿多(島山) 忠宗後嗣					■阿多→ 島山
28 寛文7			千代松(寛文7、11、22~貞享4、12、28) 種子島伊時初室				▲種子島
29 寛文8			鶴千代(寛文8、10、23~享保18、8、6) 兄(北郷) 忠長養女→彌生久明室			▲北郷→	▲(彌生)
30 寛文9		安千代(寛文9、9、10~元禄9、2、29) ○玉利重勝娘 肝付兼柄室					▲肝付
31 寛文10		梨婆千代(寛文10、3、2~寛延1、5、1) ○(養母) 和泉忠参姉 種子島伊時後室 *4					▲種子島
32 寛文12 (1672)			重矩(久重。寛文12、2、28~享保20、3、25) □(福崎氏) 大米院親重後嗣				■入来院
33 延宝元 (1673)			久房(延宝1、4、10~享保17、11、1) 元禄14年11月14日準五男家			別立	
34			松鶴(延宝1、11、19~延享1、4、1) 島津久輔室			▲兼根	
35 延宝2			龜松(延宝2、2、17~元禄7、9、26) 島津忠伴室			▲加治水 二男	
36 延宝8 (1680)			久雄(久茂。延宝8、9、2~延享4、10、2) 兄島津久侶養子			■新城	
37			龜千代(延宝8、12、17~延宝10)				
38 天和3 (1683)			徳鶴(天和3、10、16~享保10、11、6) 北郷久嘉室			▲北郷	
39 貞享4 (1687)			久岐(貞享4、11、14~寛保1、8、28) 高橋和周孫娘婿養子(辞去)→税所氏(母の氏)				■高橋 →税所

*1 久祐二男勝之は三枝家婿養子。

*2 後室は光久養女。

*3 味方氏は江戸の人。

*4 実母は津田氏・産後死去。

□()は「島津氏正統系図」とは別史料で出自の判明するもの

表3 綱貴子女一覽

婿家・養家(男■女▲)分類

生年/母	二階堂宣行娘(於重・蘭室院) *1 国夫人	江田国重娘(於登代・信濃院) *2 継室	二階堂行格娘(於源・於清・春慈院)	大名旗本	公家	高津	異姓
1 延宝3 (1675)	吉貴(忠竹。延宝3、9、17～延享4、10、10)			世嗣			
2 延宝7	於松(島津因書久洪・島津光久娘の女子。延宝7、10、10～延享2、8、9) 元禄8年(1695)3月綱貴養女→島津惟久室 *3			▲佐土原			
3 延宝8 (1680)	菊次郎(延宝8、8、21～天和1、6、23)						
4 貞享4 (1687)		忠英(久通、久陳、久儲。貞享4、2、21～享保14、10、3) 維豊の代の享保9年(1724)花岡島津家				別立 (新立)	
5 貞享5		忠直(貞享5、4、5～正徳1、6、25) 島津玄蕃久慈養子				■垂水	
6 元禄3 (1690)		龜姫(元禄3、1、晦～宝永2、10、5) 喜入久兆養女→元禄4年(1691年)10月陽和院養女 近衛家久初藤中(英光院)			▲近衛	▲喜入	
7 元禄5		久方(久早。元禄5、2、26～享保4、5、20) 島津因書久洪養子				■宮之城	
8 元禄7		おてう(元禄7、1～6、10) *4					
9 元禄9		清純(元禄9、4、晦～享保9、3、25) 松寝丹波清雄養子					■林寝
10 元禄11		於松(於栄。元禄11、1、17～明和8、6、8) 松平飛騨守定英室・離別[享保元、1]		▲久松松平			
11 元禄12		久東(元禄12、3、20～正徳2、11、3) 島津勘解由久當養子				■佐志	
12							
13 元禄14		於奈百(元禄14、5、20～享保4、1、10) 島津藤次郎久智室				▲豊州	
14 元禄15						▲明田	
15 元禄16 (1703)		於剛(元禄16、3、27～享保6、12、22) 桂七郎久智室				▲桂	
16 宝永1 (1704)						■久福 ■島津主水久輔養子	

*1・2 「御祭祀提要」に於重は「御妾」、於登代は「(後)御夫人」と記載。

*3 所生の女子は立花出雲守貴長室。 *4 「御祭祀提要」には「於長」元禄7、1、17あり。

表4 吉貴子女一覧

生年/母	名越恒渡妹 (於須磨・月桂冠)	隠居以後の御室：○相良長賢娘 (於源) △郷田兼近娘 (於幾) ◇近藤嘉包娘 (於坂)	大名旗本	公家	島津	異姓
1 元禄12 (1699)	満君 (元禄12、8、24～正徳5、11、晦) ○正室を母に→近衛内大臣家久後継中			▲近衛		
2 元禄14	継豊 (元禄14、12、22～宝暦10、9、20) ○正室を母に		世嗣			
3 元禄16	於喜代 (島居忠教と島津綱久娘 (勝姫) の女子於糸、元禄16、1、11～宝暦9、12、28) 牧野成央室→成央死去、享保6年1月26日吉貴養女・正室名付→12月婚姻許可・享保7年4月23日阿部正福室 (光朝院)		▲牧野→阿部			
4 宝永1 (1704)	幹姫 (宝永1、3、11～宝永4、10、29) ○正室を母に					
5 宝永4	忠五郎 (宝永4、4、20～宝永5、10、23) * 1				(加治木)	
6 宝永5	貴徳 (久典。宝永5、11、23～寛政3、3、10) 島津玄蕃忠直 (宝永8年死去) 養子				■垂水	
7 宝永7 (1710)	於久 (於繼。宝永7、閏8、1～寛政2、10、10) 島津大学久章 (久尚) 室				▲花園	
8 享保9 (1724)		○於弘 (享保9、8、6～享保11、5、3)				
9 享保19 (1734)		△忠紀 (壮之助。享保19、9、3～明和3、6、5) 元文2年3月越前島津家跡相続決定 * 2				別立 (再興)
10 元文1 (1736)		△久亮 (知之助。元文1、2、27～宝暦13、9、26) 島津久倫養子				■宮之城
11 元文2		△徳姫 (於徳。元文2、5、21～宝暦6、3、23) ○正室を母に 島津出雲久定 (久暢) 室				▲日置
12 元文3		△貴澄 (小源太。元文3、11、1～文化4、3、5) 島津玄蕃貴徳養子				■垂水
13 元文5 (1740)		◇於民 (元文5、9、15～安永6、10、4) 伊勢巨貞矩室				▲伊勢
14 寛保2 (1742)		◇忠卿 (三次郎。寛保2、2、12～宝暦4、11、13) 延享元年 (1744) 和泉家名跡相続決定 * 3				別立 (再興)
15 延享1 (1744)		◇忠温 (安之助。延享1、12、6～安永7、8、25) 林養清香養子・「小松」改号→宝暦6年 (1756) 2月21日辞去、忠卿後嗣				■一今和泉 (小松)
16 延享4		◇於供 (延享4、4、1～宝暦4、6、13) 島津岩架梁許嫁・島津筑後久茂養				▲(都城)

* 1 加治木家相続予定・夭折。

* 2 母は於須磨、内々於須磨跡相続の形。

* 3 吉貴隠居跡相続の形。

婚家・養家 (男■女▲) 分類

表 5 継豊子女一覽

【継豊】 正室 松平 (毛利) 吉元娘 (皆姫・瑞仙院) ◎継室 竹姫 (淨岸院)		婚家・養家 (男■女▲) 分類				
生年/母	◎継室：竹姫 (淨岸院) ○嗣室：渋谷貫臣娘 (於嘉久) ◎宗信 (忠顯。享保13、6、13～寛延2、7、10) ◎継室竹姫を母に	嗣室：△四本為規娘 ◇高津久房娘娘 (於登免) □伊地知季鄰娘 (おはん)	大名旗本	公家	高津	異姓
1 享保13 (1728)			世嗣			
2 享保14		△於貞 (享保14、1、16～寛延4、8、11) ○於嘉久を母に 權山七郎久備室			▲權山	
3		◇重年 (久門、享保14、2、11～宝暦5、6、16) 高津兵衛久住養子→寛延2年 (1749) 兄宗信養子	兄宗信 世嗣		←■加治木	
4 享保15	○於鐘 (享保15、5、5～享和3、6、25) 肝付彈正兼伯室					▲肝付
5 享保16	○於藏 (享保16、7、15～文政2、2、3) 高津市太夫久隆室				▲新城	
6 享保17		□久峯 (享保17、閏5、1～明和9、6、20) 高津木工久豪養子			■佐多	
7 享保18	◎菊姫 (享保18、5、1～文化5、3、17) 松平修理大夫 (黒田) 重政夫人 宝暦12年7月14日重政死去→改名 (真舍院)		▲黒田			
8 享保19		□於就 (享保19、6、20～享保20、10、7)				
9 元文1 (1736)	○定勝 (定教。元文1、4、9～天明1、10、9) 入来院主馬定恒養子					■入来院

下の藩内有力諸家に入る。家久から光久の代は、藩内の統治に対する危機感の存在、諸家の事情（当主や世嗣不在など）への対応、特に島津氏支流でも中世以来の由緒と所領を持つ北郷家（都城島津家）や、近世初期に脇の惣領家と目された垂水島津家と義久二女の血統を受継ぐ新城島津家、垂水家にかわり新たに脇の二男家の扱いを受けるようになった加治木島津家（光久異母弟忠朗を祖とする）や祢寝家などへの対応には政治的意図が見られる。また本宗家側の統制の意図が全てではなく、種子島家や加治木家における当主や家臣団の要望に対応する婚姻も確認できる。

綱貴と継豊代には新たな家も創設された。花岡島津家創設は、綱貴の代の元禄一三年（一七〇〇）七月に久備に与えられた五千石が基盤である。元禄一四年一〇月には、光久庶子大藏家など三家が分立された。元禄一四年一二月には世嗣吉貴に鍋三郎（継豊）が生れる。大藏家成立の経緯や藩主綱貴の意図は不明だが、後世の天保期には、大藏家などの分立が本宗家にとって好ましくない結果になったとの批判もなされている。また中世に断絶したとされる越前・今和泉島津家の再興時の藩主は継豊だが、実際には隠居吉貴により、吉貴の幼い子供に相続させる形ですすめられ、近世初期の垂水・日置・加治木島津家に加えて、新たな二男家が創出された。

薩摩藩では、18世紀中期には総じて家筋と家格が固定化され、吉貴子女はほぼ一門家・大身分の家に縁組した。但し継豊の子女は、宗信と菊姫⁸、加治木島津家を相続した久門（七代藩主重年）を除き、一門家・大身分の家に縁組したわけではない⁹。

（三）重豪以後の子女縁組

従来の大名家と島津家の縁組は、徳川家門の伊予松山藩・伊勢桑名

（越後高田から陸奥白河を経る）藩・伊予今治藩の松平（久松）氏を中心としたもので、その関係から若狭小浜藩酒井家、備後福山藩阿部家とも姻戚関係となる。また佐土原藩島津家は勿論、同家とも姻戚の下総佐倉藩島津家や、上野小幡藩織田・長州藩毛利家などを姻戚とした。

宝暦六年（一七五六）正月晦日、綱貴室信詮院（江田氏）が鹿児島島の武邸で死去（93歳）する。このことは江戸の重豪をはじめ関係者に周知された。特に松山藩主松平定喬に対しては、祖母の死去のみならず、父定英と離縁後、国元に戻った実母於栄¹⁰の状況も報され、竹姫や菊姫からも香奠などが届けられている。これまで於栄と定喬母子の文通は許されていたが、対面は遠国故に難しかった。宝暦九年一月一日、松平家側からの働きかけにより、重豪から於栄の伊勢参詣と定喬の参勤に併せて、翌年に大坂での対面許可申請がなされる。宝暦一〇年二月二八日に鹿児島を発った於栄は、四月に我が子との対面を果たし、九月六日に帰国¹¹した。於栄が明和三年（一七六七）一二月に剃髪して信詮院と称し¹²、同年六月八日西田邸で死去した際には、老中松平武元より信詮院の事例から幕府へ届け出るべきとの指南を受けている¹³。綱貴に正室扱いされた江田氏並に、大名家に一度は嫁し嫡子を生んだ於栄は扱われている。

縁組から数世代間に及ぶ中で、島津家の親類もかなりの広りをもった。重豪が藩主となって間もなく、宝暦八年三月から六月頃の成立と推測される「御親類并御由緒柄」には、70名程の人名が列挙されている【別表】。但し重豪の代以前は、（二）で述べたように子女の大名家との直接の縁組は少ない。この点が重豪及び九代藩主斉宣（忠堯）・一〇代藩主斉興（忠温）子女の縁組との相違であるとされる【表6〜8】。勿論この相違は、竹姫（浄岸院）が一橋家を通じての徳川家と島津家の関係維